

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：32623

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24760522

研究課題名(和文)近世武家住宅における唐紙の用例に関する研究

研究課題名(英文)Study on Karakami that was used on Samurai Residence, Edo period.

研究代表者

小粥 祐子(OGAI, Masako)

昭和女子大学・人間社会学部・助教

研究者番号：60398708

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：近世武家住宅における柱間と天井の装飾方法のうち、唐紙による装飾の用例について遺構および史料調査から明らかにした。

遺構調査からは、唐紙の用例を桃山期の都久夫須麻神社本殿天井絵まで遡れること、類似する用例が寛永期の名古屋城本丸御殿上洛殿と湯殿書院の天井絵に見られる事が分かった。

史料調査からは、金沢城の御殿では江戸と地元の唐紙とが併用されていることを確認した。また、江戸城について、西丸御殿において唐紙が最初に使われる事例は慶安期の大奥であること、弘化期の本丸御殿において金砂子で加飾した唐紙が用いられたことを確認した。

研究成果の概要(英文)：We have investigated remaining architectures and archives to clarify how Karakami was used on ceiling, wall and door in Samurai residence during Edo period.

From recent analysis of remaining architectures, Ceiling picture of main building of Tukubusuma shrine in Momoyama period has been identified as the first application of Karakami. In Nagoya castle main palace, similar application has been also found at Jyourakuden and Yudonosyoin during Kanei period.

From recent analysis of archives related to Kanazawa castle, it has been also clarified that Karakami made in Edo and local area were used both. The first example which Karakami was used for in a Nisinomaru understood that it was a palace of the Kaei period, and it has been clarified that Karakami was decorated with gold Sunago in Honmaru Residence, Koka period.

研究分野：日本住宅史

キーワード：唐紙 室内意匠 柱間 天井絵 都久夫須麻神社 名古屋城上洛殿 江戸城本丸御殿 金沢城二丸御殿

1. 研究開始当初の背景

近世武家住宅の柱間と天井の装飾は、その部屋の用途に合わせて、障壁画または装飾料紙により装飾された。近世武家住宅は、儀式などの公式行事が行われる公的な部分と日常生活を送る私的な部分とからなる。障壁画は公的な部分に用いられた。障壁画については、絵そのものも含め、障壁画の画題と絵師の一覧など様々な記録が残されていることから、美術史はもちろんのこと建築史の分野でも研究が進んできた。

一方で、装飾料紙は私的な部分に用いられることが多い。本研究で言う装飾料紙とは、壁紙や天井紙のうち、絵が描かれず金砂子のみで装飾された料紙や色紙、唐紙のことを指す。装飾料紙は、その住宅の生活歴の中で度々の貼り替えが行われるために装飾料紙そのものも史料も残りにくい。このことから装飾料紙に関係する室内装飾に関わる研究はあまり進んでいない。そこで本研究では、装飾料紙のうち、唐紙を研究対象とした。唐紙とは、文様を木版で多色刷りした紙のことである。

研究代表者が本研究を始める前までの唐紙に関わる用例研究では、近世末期の江戸城本丸御殿の大奥において、最も格式が高い対面所以外の主要御殿の天井・壁面に唐紙が用いられ、御殿の室内意匠があたかも「唐紙に包まれる」という表現にふさわしいことを明らかにしている¹⁾。

しかし、拙稿は近世武家住宅の中の、幕府の政庁であり住宅である1事例に過ぎず、いくつかの現存遺構や史料から予測される、近世武家住宅の室内意匠における唐紙の使用状況の全貌を明らかにするには程遠かった。

そこで、本研究では、先ず近世武家住宅における唐紙の用例を総体的に明らかにすることが狙いであった。

2. 研究の目的

近世武家住宅の室内意匠において、唐紙は、障壁画とともに重要な装飾要素の位置を占める。

そこで、本研究は、近世武家住宅の室内意匠における唐紙の用例を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

研究の方法としては、近世武家住宅における唐紙の用例を把握するため、近世武家住宅に関係する遺構の調査と近世文書および図面などから唐紙に関する記述を探し出す史料調査の2つの方法を取った。

また、遺構調査の過程で、唐紙の作成工程を分析するにあたり、現在も江戸時代から続く手法で唐紙を作り続けている唐紙師からのヒアリング調査も行った。

4. 研究成果

(1) 遺構からみる唐紙の用例

都久夫須麻神社本殿の天井絵

：桃山期 慶長7(1602)年

都久夫須麻神社本殿は、方三間の身舎の四周に庇を回した構成である。庇部は永禄10(1567)年に建てられた建物で、慶長7(1602)年に、その内部に別の建物を組み入れて身舎としたと考えられている。身舎部分については、伏見城の遺構とする説²⁾や豊国廟御亭の遺構とする説³⁾がある。身舎の外周は極彩色の丸彫り彫刻で飾られ、内部は金碧障壁画や金箔押しの飾金物で荘厳されていて、桃山時代の華麗な装飾を代表する貴重な遺構として国宝に指定されている。

都久夫須麻神社本殿の天井は折上格天井で、各格間には草花の絵が描かれている。天井絵は、金箔地とし、草花を画面の中心に描き、その周囲を紺色の木瓜火灯形(以下、木瓜棹)の帯で縁取り、木瓜棹の外を桐と菊の文様で飾っている。

これまでの研究によると、本殿の天井絵に用いられた桐・菊文様については、須賀みほ氏による記述がある。須賀氏は『花木の象国宝都久夫須麻神社』⁴⁾の中で、「格間に菊と桐の紋を散らした金地の木瓜火灯形の狭間が作られ、その内側に天井画各面が描かれている」としている。しかし、桐・菊の紋が唐紙文様については言及されていなかった。

都久夫須麻神社本殿の折上格天井の格間は、平らな部分に36面、折り上げ支輪の部分に24面、合計60面あり、その各面に草花の絵が描かれている。

平らな面の格間の内法寸法は80cm×80cmで、天井絵が描かれた料紙は図1のとおり3枚の紙を貼り合わせている。天井絵の詳細な観察から、まず、料紙全面に金箔を押し、その上に桐と菊の文様を摺り、草花の絵を描き、その後木瓜棹の帯を紺の顔料で描いていることが知られた。また、棹内は絵を描く前に柿渋と思われる材料で具引きされていて、棹外の金箔の輝きとは異なり、渋く抑えられている。これを纏めると、推測される工程は、料紙を貼り合わせ 金箔貼り 棹取り 棹内の具引き 桐と菊の文様摺り+草花の絵を描く 紺の顔料で木瓜棹を描く、となる。

次に唐紙文様の摺り方についてみる。天井絵に用いられた桐は「五七の桐」である。菊文様の大きさはほぼ同じであるが、デザインには数パターンあり、また、同一面の天井絵における菊の文様をみても数パターンみられた。

一般的に、京唐紙に代表されるような唐紙文様を摺る場合、大きく分けて、文様を陽刻した板木にふるいで顔料をつけて摺る方法と文様を切り抜いた型紙に顔料を付けた刷毛で摺る方法とがある。調査の結果、桐は文様の周囲が鋭くなっている上表面が平らになっていることから、型紙を用いて摺っていると判断した。一方、菊は、型紙と板木と両方の摺り方が混在していた。このことは、菊の



図 1 牡丹の天井絵 (赤線が紙継部分)

デザインが数パターンあることにも関係していると考えられる。

江戸時代の一般的な唐紙の場合、横 1 尺 5 寸、縦 1 尺ほどの板木あるいは型紙を用いるので、その範囲での文様の配置は一定であり、また、この大きさの唐紙を貼り継いだ場合には同じ配置の繰り返しが見られる。しかし、都久夫須麻神社本殿の天井絵の場合、部分的には規則的な配置が認められるが、全体として規則性はみられなかった。このことから、都久夫須麻神社本殿の天井絵に用いられた桐と菊の文様は、小さい板木または型紙を数種用いて摺られたのではないかと考えられる。

都久夫須麻神社本殿の天井絵の例は、唐紙とその文様が天井に用いられた最も古い遺構ということになる。

名古屋城本丸御殿上洛殿・湯殿書院の天井絵

：江戸初期 寛永 11 (1634) 年

名古屋城本丸御殿は、慶長 20 (1615) 年に建てられ、内部は狩野派による豪華な障壁画と天井絵で飾られていた。本丸御殿そのものは、昭和 20 (1945) 年の空襲で焼失してしまったが、障壁画と天井絵は空襲前に取り外され保管されていたため残されており、現在は重要文化財に指定されている。

本丸御殿には、主要な建物として、虎之間、表書院、溜之間、対面所、下御膳所、鷺之廊下、梅之間、孔雀之間、柳之間、上台所、上洛殿、渡廊下、朝顔廊下、上御膳所、雁之廊下、黒木書院、湯殿、湯殿書院などの建物が建てられている。昭和 5 (1930) 年から昭和 20 (1945) 年に空襲で焼失するまでの間に名古屋城を実測した図面 (名古屋城所蔵 昭和実測図) によると、名古屋城本丸御殿の主要な部屋の天井は、梅之間 (猿頬天井) と渡廊下・朝顔廊下 (仕様不明) 以外、格天井であった。このうち、上洛殿と湯殿書院の格天井の格間には草花などの天井絵が貼られている。(上洛殿と湯殿書院以外の格天井は木地

のまま天井絵等による装飾はない。)

上洛殿と湯殿は、寛永 11 (1634) 年に三代徳川将軍家光の上洛に際し、本丸御殿に新築された建物で、名古屋における家光の宿舎、つまり住居としての役割を果たした。上洛殿の室内意匠の特徴については、「桃山様式の爛熟期の典型的遺構」⁵とされている。つまり、先に述べた都久夫須麻神社と同じ様式であるということになる。

上洛殿は、上段 (三間×二間半、北側に床・二間×半間と柵・一間×半間)、納戸間 (二間×二間半、西側に納戸構)、一之間 (三間×三間)、二之間 (三間半×三間、北側に床・二間半×半間と柵・一間×半間)、三之間 (三間×三間半)、松之間 (四間×二間半、西側に床・二間半×半間) などの部屋からなり、これらの部屋の東・西・南に入側 (幅一間) が巡っている。これらのうち、上段は二重折上格天井、一之間は折上格天井、それ以外の部屋および東・西・南入側の天井も格天井で、格間は天井絵によって装飾されていた。上段の二重折上格天井は、格間が全部で 102 面 (一重目の折上げ支輪部分 30 面、一重目の平坦な部分 40 面、二重目の折上げ支輪部分 28 面、二重目の平坦な部分 4 面) あり、それぞれに貼られた天井絵も 102 枚残っている⁶。一之間の折上格天井の格間は折上げ支輪部分が 32 面・平坦な部分が 64 面、二之間の格間は 104 面、三之間の格間は 80 面、入側は 276 面あり、これらについても、それぞれの格間の数だけ天井絵が残っている⁷。

湯殿書院は、元湯殿 (四間×一間半)、湯殿 (三間×三間半)、上段 (二間×三間、西側に床・二間×半間)、一之間 (二間×五間)、二之間 (二間×五間、西側に床・二間×半間) などからなり、これらの部屋の東と南に入側 (幅一間) がついている。これらの部屋の天井は、いずれも格天井であるが、天井絵が残っているのは上段のみである。上段の格間は 48 面あり、天井絵も 48 枚残っている。

上洛殿上段・一之間・二之間・三之間・入側と湯殿書院上段の天井絵のうち、唐紙の文様が使われていることが明らかであるのは上洛殿上段・一之間・二之間と湯殿書院上段で、唐紙の文様は中央に描かれた絵の周囲を枠を取るように使われている。

上洛殿御上段の天井絵に用いられた唐紙の文様は牡丹である。天井絵の中央に墨絵で山水や鳥などの絵を描いた周囲に木瓜枠が作られ、木瓜枠の外側に緑地に金で牡丹の文様が摺られている。

一之間の天井絵に用いられた唐紙の文様も牡丹で、天井絵の中央に墨絵で山水や鳥などの絵を描いた周囲に白で四角い枠が作られた外側に金で牡丹の文様が摺られている。

二之間の天井絵に用いられた唐紙の文様は菱形の連続模様で、やはり天井絵の中央に墨絵で絵が描かれた周囲を青で四角い枠が作られ、その外側に金地で菱形の連続模様が摺られている。

湯殿書院上段の天井絵に用いられた唐紙の文様は牡丹で、天井絵の中央に彩色された山水や草花などの絵が描かれ、その周囲に白で円がつくられ、その外側に金で牡丹の文様を摺っている。

湯殿書院上段の天井絵の作成工程を検討すると、料紙を貼り合わせ 金箔貼り 枠取り 枠内の具引き 文様摺り+絵を描く 丸枠を描いたと考えられる。この作成工程は、都久夫須麻神社本殿の天井絵と同じである。



図2 湯殿書院上段の天井絵 百合図
『重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画集』p.191より転載

(2) 史料からみた唐紙の用例 金沢城二丸御殿に用いられた唐紙

：江戸中期 文化6(1809)年

金沢城は、本丸、二之丸、三之丸、鶴之丸、東之丸、新丸などの郭からなり、御殿や門、櫓などの建物が建てられた。本研究で対象とする上層武家住宅に関しては、本丸御殿、二之丸御殿がある。

このうち、本研究では、二之丸御殿の文化六年に再建された際の工事記録に関する文書と図面を調査した。その中から、特に、『文化六年巳三月吉日 二ノ御丸御造営留帖 才紀仁右衛門』、『御造営方日並記』、『肝煎幸蔵諸事留』から、唐紙の文様に関する記述を確認した。

金沢城二之丸御殿は、文化5(1808)年に御殿からの出火により焼失し、翌6(1809)年に再建された。『文化六年巳三月吉日 二ノ御丸御造営留帖 才紀仁右衛門』は、加賀藩年寄本多安房守家に仕えた紙細工職人 才紀仁右衛門による記録で、襖の制作方法や二之丸御殿で用いられた唐紙の文様に関する記述がある。『御造営方日並記』は、この二之丸御殿再建の造営方役所奉行であった高島厚定によって記された。『肝煎幸蔵諸事留』は、金沢町肝煎を勤め、二之丸御殿再建に際し造営方主付であった森幸蔵によって記された。このうち、本報告では、『文化六年巳三月吉日 二ノ御丸御造営留帖 才紀仁右

衛門』(以下、『二ノ御丸御造営留帖』と略記する。)と『御造営方日並記』について報告する。

なお、文化5(1808)年造営の金沢城二之丸御殿の室内意匠に関しては、美術史の立場から太田昌子氏の詳細な研究があり、本研究においても多大な影響を受けた⁸。

-1 『二ノ御丸御造営留帖』にみる唐紙の文様

『二ノ御丸御造営留帖』において、金沢城二之丸御殿に用いられた唐紙の文様に関する記述は、十月二日の項に見られる。明らかに唐紙の文様を示していると思われる記述は、「紗綾紋」(「表御式台階上ノ竹ノ御間・広椽之間天井」)、「金箔並あいる形、さや形」(御式台天井)、「さや形」(「同(虎御間)御廊下通御式台ノ矢天井御間さかへ迄」)の3種類が挙げられる。いずれも表向きの格式高い部屋に用いられている。

この他に、十月二日の項に「一、御装束御間 御から紙桐金箔かけ、ひなた白地ナリ、御板天井」とあり、「桐」は唐紙の模様を示しているとも捉えられるが、『二ノ御丸御造営留帖』を初め、文化6年再建の二之丸御殿に関する文書や図面には、襖を「から紙」あるいは「唐紙」という記述している場合が多く見られる。このことから、『二ノ御丸御造営留帖』からは、明らかに唐紙の文様の形を示していると思われる「形」という記述だけを取り上げた。

①-2 『御造営方日並記』にみる唐紙

『御造営方日並記』に記載された唐紙の文様は、江戸で購入したものと、地元で購入したものとのがある。また、江戸で購入した唐紙は「金」が多用される傾向にあり、地元で購入したものは、あまり「金」が用いられていない。

江戸で購入したと思われる唐紙は、「松」(御仏間)・「浅黄地唐花輪地」・「金唐花輪」・「金中桐」(御仏間・御見物所の柱間)・「金唐花」(上ノ御間の天井)・「白地二金桐形」⁹・「野筋」・「金二而白地二角二テ、右浮泉蝶」(御対面所の天井)・「白地二金桐形」・「大菱金模様」(御居間廻御椽側の天井)¹⁰などで、『御造営方日並記』の六月廿七日の項に

六月廿七日

一、壹貫五百八拾目 大暮之内浮仙蝶、金模様御唐紙地、百枚直段、江戸唐紙屋太左衛門ノ御買上、同人方未直段極書出不申、本勘渡指支、金谷佐大夫引請、直段極書出承届、

とある。この金で浮仙蝶を摺った唐紙は、江戸の唐紙屋太左衛門から購入したことが分かる。つまり、江戸唐紙が金沢藩の御殿を飾っていたことになる。なお、唐紙屋太左衛門については、元禄5(1692)年に出版された『万買物調方記』には、江戸の「地からかみや」の項目に「石町二丁目 太左衛門」の名

前が見られる。

なお、本報告では触れないが、本研究の過程で、金沢城二之丸御殿で江戸唐紙が使われた事と同様に、江戸唐紙を国許の御殿で用いた可能性がある例として熊本城御殿に関する文書を確認した¹¹。

一方で、地元で購入したと思われる唐紙は、「白地二牡丹・唐草」・「茶地小牡丹・唐草」・「紺地二花菱・唐草、金蘭」・「白地二雲形、金蘭」があり、「表具師八郎兵衛」や「能とや市右衛門」から購入している¹²。

江戸城西丸御殿における唐紙の用例について

：江戸初期 慶安3（1650）年西丸御殿は、文禄3（1594）年・寛永元（1624）年・寛永13（1636）年・慶安3（1650）年・天保10（1839）年・嘉永5（1852）年・元治元（1864）年竣工の7回建てられた。

西丸御殿における唐紙の用例については、本研究を行う以前に拙稿により、嘉永5（1852）年竣工の西丸御殿大奥の場合は対面所以外の主要御殿の天井は鏡天井で唐紙が貼られ¹³、最後の西丸御殿であり西丸御殿再建工事に本丸御殿が消失したことによって本丸御殿の機能を持った元治元（1864）年竣工の西丸御殿中奥の場合も鏡天井には唐紙が貼られたことがわかっていた¹⁴。

本研究で、西丸御殿の他造営度の事例として、慶安3（1650）年に竣工した（以下、慶安度と呼ぶ）西丸御殿表・中奥の元禄～明和期における鏡天井に施された装飾を整理した結果、中奥の御座之間・御休息・御小座敷の鏡天井は、「砂子」を撒いた紙、「内曇り紙」、「青紙」あるいは染程村紙によって装飾された。

このことから、現時点で、西丸御殿において唐紙が使われるようになる最初の事例は、嘉永5（1852）年の事例からということを確認することができた。

江戸城本丸御殿大奥に用いられた唐紙に関する新出図面について

：江戸末期 弘化2（1845）年幕府の居城である江戸城本丸御殿における唐紙の用例については、本研究を行う以前に拙稿により次のことを明らかにしていた¹⁵。

江戸城本丸御殿は、公的な空間である表向と将軍およびその家族が日常生活を送るための私的な空間である奥向（中奥・大奥）からなり、将軍が直接的に関わる御殿向と将軍に仕える人々が働く役所向に分かれる。このうち、弘化2（1845）年竣工（以下、弘化度と呼ぶ）と万延元（1860）年竣工（以下、万延度と呼ぶ）の本丸御殿御殿向について唐紙の用例を見ると、中奥と大奥の住居のうち、上段・下段と廊下は柱間を障壁画、天井を唐紙とし、その他の部屋については柱間と天井ともに唐紙で装飾する傾向にあった。

こうした中、本研究の過程で、弘化度本丸

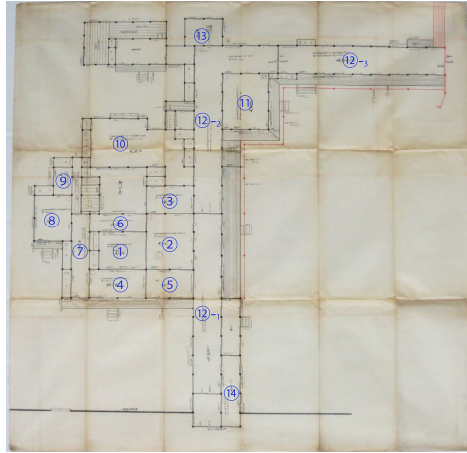


図3 『上御鈴御小座敷敷地繪圖』(山下和正蔵)
* 丸数字は、表1の部屋名に対応する。

表1 『上御鈴御小座敷敷地繪圖』にみる天井・柱間の装飾

	部屋名	部分	唐紙名
	御上段	天井	金ふせん蝶
		柱間	絵
	御下段	天井	金紺青葵唐草
		柱間	絵
	続之間	天井	金紺青葵唐草
		柱間	絵
	南御入側	天井	金紺青葵唐草
		柱間	絵
	北御入側	天井	金紺青葵唐草
		柱間	絵
	御廊下	天井	金紺青葵唐草
		柱間	絵
	薫之間	天井	金亀甲地紺青向菊
		柱間	絵（薫）
	御三畳之間	天井	金亀甲地紺青向菊
		柱間	絵（紅葉薫ソル）
	御物置	天井	（間_合藍次絵霞）
		柱間	浅黄地白ちらし梅
	御鈴番所	天井	金紺青霜形扇ちらし
		柱間	霜降金砂子紺青折鶴
	上御鈴廊下	天井	金紺青霜形扇ちらし
		柱間	霜降金砂子紺青折鶴
	御溜	天井	（間_合藍次絵霞蟬）
		柱間	蝠）
	御張出廊下	天井	-
		柱間	紺土佐紙

御殿大奥御小座敷で用いられた唐紙のデザイン名が書き込まれている『上御鈴御小座敷地繪圖』(山下和正蔵)を見出した。

弘化度本丸御殿大奥御小座敷は、西面に床と棚がついた御上段(二間×二間半)と御上段の東に御下段(三間×二間半)がある。

御上段の三方には、西に廊下(四間×一間)南入側(一間×三間)北入側(半間×三間)が廻り、いずれも畳敷きである。南入側、北入側は庭に面している。

御下段の東には上御鈴廊下が南から北へ伸び、御下段の北には続之間(一間半×三間)がある。

御小座敷の西には、蔦之間(二間半×二間)と御三畳之間(一間半×一間)があり、御三畳之間の東には大小の用場がある。

『上御鈴御小座敷地繪圖』に書き込まれた弘化度大奥御小座敷の天井・柱間に用いられた装飾を表1に整理する。表1のうち、唐紙を示しているものは、「金ふせん蝶」(御上段・天井)、「金紺青唐草」(御下段・続之間・南御入側・北御入側・御廊下の天井)、「金亀甲地紺青向菊」(蔦之間・御鈴番所・上御鈴廊下の天井)、「霜降金砂子紺青折鶴」(御鈴番所・上御鈴廊下の柱間)である。いずれも刷り色に金が用いられていることは、これまで拙稿でも指摘してきたことである。

さらに特筆すべきは、上御鈴廊下・御鈴番所の柱間を飾った「霜降金砂子紺青折鶴」のように、唐紙に版木で摺った唐紙の文様の上に金砂子で加飾している。このことは、既往研究によっても確認済みであったが¹⁶、本図によっても、唐紙を金砂子による加飾する例を再確認した。

おわりに

本研究において、実際の唐紙を見る機会が増えたことにより、それまで写真で何気なく見ていた都久夫須麻神社本殿の天井絵に唐紙とその文様が用いられていることに気づき、さらに、名古屋城本丸御殿の天井絵においても都久夫須麻神社本殿の天井絵と類似する手法で唐紙文様が用いられていることに気づいた。

これまでの研究で近世武家住宅において唐紙が用いられた用例は、江戸中期から幕末期の事例が多かったが、本研究により唐紙が用いられた遺構を桃山期の都久夫須麻神社本殿の天井まで遡ることができたこと、さらに江戸初期の名古屋城本丸御殿上洛殿・湯殿書院においても天井装飾に唐紙の文様が用いられていることが明らかとなったことは、大きな成果であった。

なお、「唐紙」あるいは「からかみ」は必ずしも文様を多色刷りした装飾料紙を指すわけではなく、「襖」を示していることがある。このことは、本研究を始める前の筆者の研究においても理解していたが、本研究の研究過程においても、「唐紙」あるいは「からかみ」が「襖」を指す事例を多く確認した。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 2件)

小粥祐子・岩佐奈美・平井 聖・斎藤 英俊「都久夫須麻神社本殿の天井絵に用いられた唐紙とその文様について」『学術講演梗概集』日本建築学会、2015.9.4、東海大学湘南キャンパス(神奈川県平塚市)

小粥祐子・平井聖「江戸城慶安度(元禄～明和期)西丸御殿表・中奥の鏡天井について」『2013年度日本建築学会関東支部研究報告集』日本建築学会関東支部、2014.2.21、日本大学理工学部1号館(東京都千代田区)

6. 研究組織

(1) 研究代表者 小粥 祐子

昭和女子大学・人間社会学部・助教

研究者番号：60398708

註

1 拙稿「万延度江戸城本丸御殿大奥主要御殿に用いられた唐紙について」『学苑 828号』昭和女子大学紀要、2009.10

2 「第一章 本殿の概略 第三節 構造形式」『国宝建造物都久布須麻神社本殿修理報告書』昭和12年

3 平井 聖『日本の美術 第200号 桃山建築』、至文堂、昭和58年

4 須賀みほ『花木の象 国宝都久夫須麻神社』中央公論美術出版、平成25年

5 「三 名古屋城御殿上洛殿」『日本建築史基礎資料集成 十七』昭和四十九年九月

6 『重要文化財名古屋城本丸御殿障壁画集』名古屋城管理事務所、1990年3月

7 同上

8 太田昌子「金箔からみた文化度金沢城二ノ丸御殿 - 『御造営方日並記』を主要資料として」『金沢美術工芸大学紀要 2009

9 『御造営方日並記 上巻』四月八日

10 『御造営方日並記 上巻』四月十日

11 『顕光院様・鳳台院様御下国二付二丸御屋形并於宮内澄之助様貞之助様御住居向御作事一件』(永青文庫蔵)

12 『御造営方日並記 下巻』八月十日

13 拙稿「嘉永度江戸城西丸御殿大奥主要御殿2種類の平面と室内意匠の関係」昭和女子大学紀要『学苑』2010

14 拙稿「江戸城西の丸御殿中奥の唐紙について」日本建築学会『学術講演梗概集』2007

15 拙稿「万延度本丸御殿大奥における室内意匠の構成」『学苑 820』昭和女子大学紀要、2009、「万延度江戸城本丸御殿大奥主要御殿に用いられた唐紙について」『学苑 828』昭和女子大学紀要、2009

16 註1に同じ